八尾市教育センターNEWS

令和３年３月
所報：359

教育相談
072-941-3365

情報推進
072-943-5785

研究・研修
072-943-5784

八尾市ホームページ https://www.city.yao.osaka.jp
（「教育委員会」のページよりご覧ください）

初任者研修　閉講式

日　時　　令和３年２月 18 日（木）　15:00～17:00
講　師　　教育センター指導主事・初任者指導員

４月に八尾市へ赴任した市立学校初任者を対象に、今年度最後となる研修を実施しました。今年度は、コロナ禍でのスタートとなり、例年とは全く異なる１年間になりましたが、そんな中でも子どもたちとの関わり合いの中で、日々成長してきました。

初年度の最後の研修でしたが、前回の研修に引き続き、オンライン研修となり、「『一年間のわたし』を振り返る」という内容で、自分自身が成長したことを振り返ったうえで、来年度に向け、目標とする教師像を考え、さらに成長するための方法について交流を行いました。

その後、「２年目を迎えるみなさんへ期待すること」という内容で、初任者指導員が講義を行いました。その中で「学校生活のほとんどの時間は授業であり、学校が楽しくあるためにも、授業力を高める努力をする責任がある」という話がありました。また閉講式の所長挨拶では、「児童生徒の視点を基礎とした教育実践力を養い、子どもからも保護者からも信頼される学び続ける教職員となって下さい」という話がありました。

初任者からは、「たくさんの先輩の先生方や、子どもたちにとても感謝しており、学び続ける教職員であるために、今後もたくさんの人から吸収して成長していきたいです。」「準備をしないと前に立てないという言葉を大切に、初心を忘れず２年目につなげていきたいです。」といった感想がありました。

教育現場は様々な課題と向き合うところですが、ともに学んだ教職員の仲間とともに、成長し続ける教職員であり続けてほしいと思います。

GIGA スクール構想の実現について

八尾市立学校への高速通信ネットワークと１人１台端末の整備が令和３年３月に完了します。これからは授業を行う教室や体育館に無線 LAN の環境が整い、児童生徒がより日常的に端末を活用して学ぶことが可能となります。

そのような中で、情報活用能力（情報モラルを含む）とよばれる力は、学習指導要領において学習の基盤となる力であることが明記されており、様々な場面において、ICT を効果的に活用し、子どもたちへ確実に定着させることが求められています。

教育センターではこれからも子どもたちにより良い教育を行えるよう、研修等を通じた学校への支援を継続して行っていきます。

＜就学前教育＞特別支援教育・保育ゼミ　園内研究会について

今年度、特別支援教育・保育ゼミでは、子どもの見取りや保育者の支援方法などを学び合うことを目的として「園内研究会」を実施しました。たくさんの参加者が特定の子どもを観察することで、丁寧に状況を把握したり、同じ場面であっても、いろいろな内面の捉え方や支援方法があることに気付いたりすることができ、より深い討議となりました。

日　時　　令和３年１月２１日（木）
公開園　　安中ひかりこども園　４歳児

【園内研究会より】

〇子どもの興味・関心をクラスの遊びへ

Ａ児は進級当初、学級活動に全く入れませんでした。虫が好きで戸外では担当保育者と虫探しをして遊ぶことが多く、夏を過ぎた頃から友だちと虫探しをするようになってきました。室内でも友だちと遊んでほしいと思い、Ａ児の好きな『虫』を遊びの中に取り入れました。当日も保育室には、虫のコーナーがあり、Ａ児は友だちと一緒に虫のかぶり物を身につけ、虫のリレー遊びや、虫のパーティー、虫の運動会を楽しんでいました。

Ａ児の興味・関心が『虫』にあることを把握し、虫探しで友だちと関わり始めたタイミングを逃さずクラスの遊びの中に虫を取り入れていました。無理に周りの子どもとＡ児をつなごうとせずにＡ児の興味・関心に応じた環境構成を工夫することで、Ａ児とクラスの子どもたちが自然に関わるようになり、遊びがクラスへ広がっていきました。

＜虫のリレー遊び＞
虫をコマにして、さいころの出た目の数を進み、早くゴールしたら勝ちという遊び

〇共通の遊びでもやり方や楽しみ方はそれぞれ

Ｂ児は自分がしたい遊びを見つけられるようになってきましたが、友だちの遊びに自ら入っていくのは難しく、一人で遊ぶことが増えていました。当日は一人で絵本を見ていたＢ児に担任が何度か声をかけ一緒に本を見た後、踊ることが好きなＢ児をショーごっこに誘いました。表情は強張っていましたが、Ｂ児の好きな曲をかけ、保育者も一緒に踊って楽しい雰囲気をつくることで、次第にＢ児の表情が和らいできたので、保育者はＢ児と友だちがかかわる機会をつくりました。また、楽器をもって踊る際には、楽器を複数提示しＢ児が好きな物を選べるようにしていました。

ショーごっこという遊び１つをとっても、衣装を身につけてなりきって遊ぶ子ども、カメラマンになって写真を撮る真似をしている子ども、曲に合わせて楽器を鳴らす子どもなど楽しみ方は様々です。支援の必要な子どもが何を楽しいと感じているのか、『表情、視線、視線の先、反応、いつもの様子』等を手掛かりにしながら見極めて環境構成を行い、その子どもの好きな遊びを大切にしながら援助していました。

（令和２年度八尾市教育センター研究紀要（第４１号）幼児教育より抜粋　一部修正あり）

支援が必要な子どもに対しては一人ひとりの個性や発達の特性を捉え、子どもに寄り添いながら教育・保育を行っていかなければなりません。教育・保育は子どもの行動を把握し、子どもが何について困っているのか、子どもが何を楽しんでいるのか、子どもを理解することから始まります。そして、保育者はどうなって欲しい（長期目標）と思っているのかを考え、その目標を達成するためにスモールステップで、少しずつできることを増やしていきます。子どもの「自分でできた！」という達成感や、「もっとやりたい！」といった意欲を引き出すように援助をすることが大切です。

参加者からは「自分だけでなく、違う側面で様々な見取りがあることに気付くことができた」や「支援児の好きな遊びから友だちとかかわっている姿が見られ、勉強になった」「適切な支援のタイミングが大事だと感じた」などの声が聞かれました。